

この世界に来て、不思議な生物は色々見てきた。

その筆頭は無論イクキャリッジのイクであるが、千宏はそれを上回る謎の生物と今、まさに対面していた。

「船の害獣駆除に使うんでさ」

そう言ってトゥルムが見せたのは、ぎょろりとした一つ目の珍妙な生物だった。顔のほとんどが目と言おうか、全身の半分が瞳で構築されているような生物である。手足は無く寸胴で、長い尻尾があり、頭からは虎の耳が生えている。

「ベアトラです」

トゥルムがそう紹介する。なる程体毛はトラと同じく黄色と黒の縞模様だ。

千宏はかっと目を見開いて、間抜けに口を開けたまま、その生物の印象的過ぎる瞳を凝視した。

「あ、あんまりガン見してると」

何事か注意しようと、トゥルムが口を開いたまさにその時である。

「ぎゃあああ！ く、くわれたあああ！」

ベアトラと紹介された生き物がかっと口を開き、千宏の頭に食いついたのだ。体の半分の瞳が構築してるとしたら、残りの半分は口であると言っても過言ではないだろう。千宏は悲鳴を上げて仰け反り、頭にへばりついたベアトラを引っぺがそうとじたばたもがいた。

「取れぬ！ 取れぬぞこの生き物！ くあ！ 舌！ なげえ！ 舌なげえこいつ！ ハンス！ ハーンズ！！ 消化される！

口の中で消化される！ はーがーしてえええ！」

最早千宏の顔の半分まで飲み込んでいるベアトラを、ハンスが掴んで引っぺがす。

千宏はよろよろと甲板にへたり込み、唾液まみれの顔をぬぐって恐怖に唇を震わせた。

「恐ろしい！……恐ろしい世界がこの世には広がってる……恐ろしい……」

「だからガン見しちゃいけねえって……」

「食われる前に言ってよ！」

叫んだ千宏に、トゥルムは申し訳なさそうに頭をかく。

「これ、船には十匹くらいいるんで、気をつけてくださいませね、怒らせるととんでもねえことしでかすんでさ」

「とんでもない事って……？」

「目から光線が出たりしやす」

千宏は恐怖におののいた。

心なしか、ベアトラが不適に笑ったようにさえ見える。というか、先ほどは確かにあったはずの口が消失していた。物を食うとき以外は、口が見えない生き物らしい。

ハンスの手に掴まれたままぶら下がっていたベアトラは、文字通り手も足も出ない状況であるはずなのに、ぐにぐにと暴れてハンスの手から甲板へと飛び降りた。

それからもちもちと飛び跳ねながら千宏に近づき、くわっと口を開いて見せる。

千宏は悲鳴を上げて飛び上がり、ハンスの背中にしがみ付いた。

「ほ、捕食される！ 性的でない意味で捕食される！」

「可能性はまあ、否定できやせんすねえ……」

千宏が船室から一步も出ないと、決意を固めた瞬間である。

そうこうして、千宏たちは無事出港し、その一週間後にはブラウカツェの潮風を受けていた。カブラ達の乗った大型船に、遅れること約二日の入港である。

甲板から身を乗り出し、千宏はその賑やかな港町に感嘆の声を上げた。

「す……っごいネコ！！」

右を見ても、左を見ても、とにかくネコ、ネコ、ネコである。

それに混じって伺える多民族も実に豊富で、天を突く見事な角の鹿男や、トラをも上回るだろう巨体の牛男の存在に、千宏はいちいち叫び声を上げて驚いた。

これが、ネコの国最大の港町である。

「ハンスはネコの国に住んでたんだっけ？」

訊ねると、頭にベアトラをへばりつかせたハンスが頷く。最初に千宏を食おうとしたベアトラである。なぜかこのベアトラはハンスを非常に気に入ったらしく、片時もハンスから離れようとしなかった。そしてハンスの頭に乗っかりながら、怪しげな目線でじっと千宏を睨むのである。千宏はベアトラが嫌いだった。

「この街で密航して、トラの国に行ったんだ」

「密航！？」

「犯罪者だからな」

ハンスはけろりと答える。千宏は表情を引きつらせた。

「最初に言っておかなかったか」

「や……まあ、一応知ってはいたけどさ……」

実際の所、千宏はハンスの生い立ちをほとんど知らない。他人の過去を詮索している暇など無かったし、ハンスは自分からべらべらと喋るような性質では無かったから、そういった話題はほとんど会話に上らなかったのだ。

「それって、あんた逮捕されちゃうかも知れないってこと？」

ハンスは首を傾げた。

「わからん」

「わからんって……！」

「ル・ガルに行けば確実に逮捕されるが、ネコの国の法律はよく知らないんだ。犯罪を働けばその場で捕まるが、逃げ延びた場合はどうなるんだろうな」

「よっぽどの大罪じゃなきゃ、飽きたら放置が基本じゃねえのか？」

口を挟んだのはトゥルムである。

振り返ると、トゥルムは大量のベアトラを担ぎ上げ、何を思ったのかぼいぼいと船の外へと放り出していた。ベアトラは次々と波止場に叩きつけられ、しかし問題なく起き上がるなり元気よくどこかへ去って行く。

「……なにしてんの？」

「害獣の最終処理でさ。あいつら船に置いとくと、目を離れたすきに積み荷を全部食われちゃうんで、港に着くところやって捨てちゃうんでございますよ」

そうして、出港する時にまた適当に捕まえて船に乗せるのだと言う。

見渡すと、なるほどこの船でも単眼のもちもちした生物を、ぼいぼいと波止場へ投げ捨てている。

しかしその、種類の多さ。

「……いろいろいるね……」

「そりゃもう、いろいろいるんでございますぜ。ベアネコ、ベアトラ、ベアシャコなんてのもいるって話もあります」

「あたしんところには全くいなかったのに……」

パラムの家にも、小さな市場にも、遺跡の街でだって全く見かけなかった生物である。「ル・ガルにもほとんどいない。食料が無いからな」

「基本的に、人が多いところに集まるヤツラなんで、田舎の方では見かけない事がおおいんでさ。サイズも手の平サイズから人間サイズまでいるんでらっしゃいますよ」

「へー……人間サイズ……」

言って、千宏は大きく口を開けて食らい突いてきたベアトラを思い出す。

ちょっと大きなぬいぐるみサイズでそれなのだから、人間サイズのベアトラなど、千宏を一呑みにしてしまうに違いない。

「あたしから離れないでよね……！」

言って、千宏は真剣な瞳で睨むようにハンスを見る。その頭には相変わらずベアトラがへばりついているのだが、千宏は見えないふりをした。

「とにかく宿をとらにゃあ仕方がねえ。姐さん、何か希望の宿は」

「安いところ」

断言した千宏である。

だがそれにかぶせるように、

「まともなところだ」

ハンスが強い語調で言った。千宏が咎めるようにハンスを睨むと、真剣な瞳にぶち当たる。

「ここをトラの国だと思うな。あそこは特別に安全な国なんだ」

トゥルムも頷く。

「そうそう。いくらこっちはトラだつたって、ネコには魔法って武器があるんだ。あんまりあぶねえところにゃあ、近づかねえほうが身のためでありますよ。ま、宿の事はまかせてくださいませ。日が落ちる前に、またここで落ち合いましょう」

そう言っ、荷物を抱えてひらりと船から飛び降りたトゥルムは、宿屋のカウンターで腐っているいつもの陰気な虎男とは随分と違って見える。

千宏は溜息をついた。

「安全を買うか……まあ、仕方ないよね」

なにせ、ここはネコの国なのだ。

思い出すのは、小さな市場の一角で、使い古されたヒト奴隷を乗せた馬車を引いていたネコの商人、ヒトだと気付かれ、さらわれてしまったら、自分もあのカゴの中に入るのだ。

「これからどうする？」

回想に割って入ったハンスの声に、千宏は顔を上げた。

「……カブラ達を探す」

探して、どうしようというわけではない。

ただ、まるで無関係だと言うように置いていかれるのは我慢ができなかった。

「カキシヤに職人の話は聞いてきたら、そこに行けばいいと思うんだ」

と言っても、住所を言われた所で右も左も分からないネコの国である。

ハンスの手を借りてとりあえず波止場に降り立ち、千宏はネコを主とした多くの種族でごった返す港を忙しく見渡した。

獣臭い、という印象は、トラ国と比べればはるかに薄い。

すらりとしていて軽快に歩くネコたちの姿は、同じ猫科といえどトラとは全く違う生き物だった。服装も千宏のよく知る近代的な物が多く、これも民族的な雰囲気強いトラ国とは大分違う。何よりトラは、基本的に服を着るのを嫌がる傾向が強いのだ。それなので、男は半裸である確立が非常に高い。女性にしたって涼しげな薄布を巻きつけて歩いたり、下着と呼んで差し支えないようなホットパンツとチューブトップだけだったり、耐性が無ければ目の毒が脳に回って気を失うレベルの奔放さなのだ。

それでいて、とんでもない派手好きでお洒落好きなので、アクセサリだけは過剰に付ける。小さな箱庭を飛び出してしみじみと実感したことは、アカブやバラムがいかにも地味で質素でトラらしくないかと言う事だった。パルマでさえ控えめな方である。

無論戦士であるカブラやブルック達も装飾品は極力避けているが、そうでない職業のトラたちは、目がくらむほどに派手だった。それでいて、下品だとは感じないのだから実に不思議なものである。

ともかく、そういったトラの独特な美的センスと比べると、ネコの国の基準はむしろ千宏にはしっくりきた。頭からすっぽり被ったフードが、急に浮いて感じるほどだ。というかこの格好は、ネコの国だと恐らくかなり胡散臭い。

「……ねえハンス」

「なんだ」

「帽子に……代えたほうがいいかな……」

ああ、とハンスが間の抜けた声を出す。

「……個性……じゃないか……？」

「個性……で通るの……？」

「通るな」

「通るんだ……」

恐るべきネコ国の懐の深さである。

ふと、千宏の足元をもちもちと、真っ赤な体毛をしたベアネコが通り過ぎていった。

よくよく回りを見渡せば、杖を持ったローブ姿の魔法使いさえ歩いている。

「個性ね……」

言って、千宏はひとつ溜息を吐いた。

目指す義肢職人の工房は、恐ろしくあっけなく見つかった。

道行くネコに住所を書いた紙を見せると、すぐに合点したように、立ち並ぶ倉庫の方を指差してこう言ったのだ。

「一番ぶっとんでる建物を探せばいいよ。半分海にせりだす感じでたってるからさ」

なんとも曖昧な説明である。

しかし、そう言うのならばそうなのだろうと、倉庫地帯を海沿いにひたすら歩くと、果たして『ぶっとんだ』建物はすぐに千宏の目を引いた。

前衛美術的と言えれば少しは聞こえが良いだろうが、なんとも奇抜な色合いと形状をした建物である。

言ってしまうと、色とりどりのガラクタを積み上げた合間合間に、巨大な彫刻が突き出しているような、狂気の沙汰の建物である。

彫刻は半裸の女性であったり、雄雄しい表情のライオンの男だったり、それ単体で見れば恐らく見事な芸術品なのだろう。だがそれが、極彩色のガラクタから突き出しているものだから、何故か妙な不安感を煽られる。

見ているだけで精神を病みそうな建造物であった。さらにその頂点には、巨大な靴のモチーフが乗っかっている。その

靴にへばりついた看板に刻まれた文字は、千宏が間違っているのだから『天才的技師装具店・ニヤトリ』である。千宏はわけもなく滲んできた脂汗をぐいと拭い、ごくりと唾を飲み込んだ。

「め、めげそう……」

そう、弱音を吐いた千宏とほぼ同時に、ハンスが小さく呟いた。

「芸術だ……」

千宏は愕然とハンスを振り仰いだ。

ハンスが建物を見詰めるその目はまるで、美術館で素晴らしい芸術作品に出合った時のようである。

趣味は人それぞれ、で片付くレベルの美的センスでは無い気がするが、千宏はあえてそこには触れない事にした。

近づいてみると、ネコが大口を開けているような玄関が千宏たちを出迎える。

本当に腕のいい義肢職人の店なのか、千宏はだんだんと不安になってきた。カアシュの脚に付いた義足が、カラフルな玩具のような代物だったらどんな顔をすればいいのだろう。

確認するのは恐ろしいが、勇気を持って千宏はドアをノックする。

瞬間。

「いらっしやいませー！ 千客万来お客様は神様にゃあああああ！」

「あぶっ」

勢いよくドアが開かれ、それが思い切り千宏の顔面に直撃した。飛び出してきたネコ女は満面の笑顔で両手を天に突き上げ、ハンスは唾然として硬直する。

「……今、何かぶつかったかにか？」

ネコは眩き、恐る恐るドアを叩きつけられた状態のまま突っ立っている千宏へと振り向いた。

微動だにしない千宏の鼻から、崩壊した蛇口のように血液があふれ出す。

ぐらりと後方に傾いた千宏の体をハンスは慌てて抱きとめようと両腕を差し出した。しかし千宏の体はその腕をすり抜け、倒れこむ勢いのまま後頭部を地面に強打する。

「にゃ、にゃああああ！ お客さまああああ！」

とっくに花畑の彼方に飛んでしまった意識の中で、千宏はハンスとネコ女の叫び声を聞くともなく聞いていた。

潮の香りがしていた。

遺跡の街でもずっとかいでいた香りだ。もうすっかりと慣れてしまったこの香りに、今更別段感慨を覚えたりはしない。

ただどうしてか今、千宏は強く潮の香りを感じていた。慣れきったはずの海の臭いが、どうして今はこんなにも強く香るのか。

人動く気配がし、ぼんやりと目を開ける。

ここはどこだろうか。鼻の辺りが妙に傷む。

「……ハンス？」

「目が覚めたか」

呼び声に答え、千宏の顔を覗き込む影があった。だがその顔は、見慣れたイヌの物では無い。

頭から突き出た二つの目。虫の脚のように蠢く口と、ヒゲのように伸びる触角。

「ひ　　」

千宏は喉の奥を引きつらせ、瞳が零れ落ちんばかりに目を見開いた。

「ぎゃああああ！ うぎゃああああ！」

絶叫して飛あがり、千宏は寝かされていたソファの背を乗り越えて文字通り床に転がり落ちた。

それから、

「ってうわああああ！ あたしとした事がつい不意を突かれて素の反応をおおお！ 失礼しましたなんてイケメンなシャコの殿方！ 起き抜けにあんまりインパクトの強い美顔があったので思わず照れて逃げ出しちゃった！ 凜々しい触覚ですね！ あ、体の模様が渋かっこいいって言われませんか！」

「いい」

突き放すように言われた静かな一言に、千宏はごくりとして言葉を飲み込んだ。

「叫ばれるのには慣れてる。　それだけ口が回るなら大丈夫だろう。ウチのネコがすまなかつたな」

言って、巨大なシャコの男はのそりと千宏に背を向ける。

その背中に浮かぶ模様は、黒と黄色のトラ模様であった。千宏が客として相手をした、鮮やかな色彩のシャコとは随分と印象が異なる。

体格もふたまわり程大きいようで、小さなドアから窮屈そうに出て行く姿も、模様と同様にどこかトラを彷彿とさせた。

そうして、シャコ男と入れ替わるようにハンスが部屋に入ってくる。千宏はへなへなと脱力し、再びソファの背を乗り越えてぐったりと横たわった。

「大丈夫か……？」

「そう見える？」

心配そうに訊ねたハンスを、千宏は責めるような目で睨む。

「ていうか、なんか後頭部すごい痛い。ぶつけたのこれ？　すごいコブになってる」

「氷をもらってきた」

言って、ハンスが袋入りの氷を差し出す。千宏はありがたくそれを受け取り、後頭部にそっと当てて顔を顰めた。

「それで……なにか聞いた？」

「ああ……カブラ達ならすでに依頼に来たそうだ」

千宏はぱっと顔を上げる。

「じゃ、連絡先とか」

「だが、依頼はまだ成立してない」

千宏は目を瞬く。

「だって……依頼にきたんでしょ？」

ああ、とハンスは頷き、頭にへばりついているベアトラを引き剥がす。それをぼいと部屋の隅へと投げ捨て、ハンスは改めて千宏を見た。

「カアシュに合うサイズの、トラのハンター用の義足がないんだそうだ」

言われていることの意味がよくわからず、千宏は目を瞬く。

「……じゃ、作れば良いんじゃないの……？」

単純に聞き返すと、ハンスは難しげに首をかしげた。

「それが、そういうわけにもいかないらしい」

「なんでよ？　だって」

「その辺は私が説明するにゃー」

いつの間に入ってきたのか、二人の会話に女の声が入った。

千宏が驚いて振り返ると、千宏と同程度の背丈のネコが盆にジュース入りのグラスを載せて立っている。油まみれの青いツナギを着ており、毛並みは銀と言うより白である。

千宏は目を瞬いた。

毛並みがあるのだ。だと言うのに、声は確かに女性のものだ。なによりも、ツナギの下で苦しげに自己主張する乳房が確かにある。

千宏も知識でだけは知っていた。こういう生き物の事を、たしか

「……ケダマ……？」

言ってしまうから、千宏はそれが一般的にはあまり好ましくない容姿であるとされいることに気が付いた。

「あ、ごめんなさい！　あたし、無神経で……！」

慌てて言い繕おうとした千宏に、ケダマのネコは気にした風もなく笑いかける。

「ケダマを見るのは初めてかにゃ？　さっきは本当にもうしわけなかったにゃー。私はこの天才的義肢装具店ニヤトリの社長、ミーネ、見てのとおり天才にゃ！」

「いや、見たところでそんなんわかんないけど……」

「ならば貴様の目は節穴にゃああああ！」

かっと目を見開いて、ミーネと名乗ったネコが千宏を睨む。そのついでにジュース入りのグラスを渡され、千宏はやや後方に仰け反りながらそれを受け取った。

「ではそんな節穴ちゃんなお客様に分かりやすく説明するとだにゃ、ハンター用の義肢は特別に頑丈にする必要があるから、材料費がすごーくかかるにゃ。特にトラなんかは身体能力抜群だから、それに合わせると大変なことになるわけにゃね。その分加工費を安く抑えようとすると、まず雛形を作っておく必要があるにゃよ。特にウチはカキシヤと取引があるから、トラのお客様が多いにゃ。雛形作っておいても全く余らなくて商売繁盛ウハウ八にゃ」

「はあ……なる程」

「トラの標準的な体型より大き目の雛形を作っておいて、それを削って個人に合わせると言うのが主流なんだけどにゃ。あのカアシュっていうプリティートラ男の場合は小さすぎて、雛形がそもそも使い物にならないにゃ。削りを大きくすると機構のズレも大きくなるし、そもそも手間を考えると最初から作った方がいい。だからつって一からサイズをあわせて作るには、倍以上の費用がかかるにゃー」

「費用って……具体的にどれくらい？」

「ハンターの使用に最低限耐えうるだけの義足でも、五百セパタはかかるにゃあ。魔法処理を加えると更に二百セパタくらい。もとの通りに走ったりするためには機構が複雑で軽くて丈夫な義足が必要で、そのためには最低でも二千セパタは必要にゃー」

「にせ……二千セパタ！？」

思わず叫び返す千宏である。

カブラ達の貯蓄がどの程度あるかわからないが、生活や装備品の保持を考えれば、出せてせいぜい千セパタ程度だろう。

「それじゃ……カブラたちは……」

「その話に激怒して、他の職人を探すと飛び出していったらしい」

ハンスが静かに答え、千宏は頭を抱えた。

「一応止めてはみたんだけどにゃー。完全に頭に血が上って話を聞く気ゼロだったにゃ」

目に浮かぶようである。

金額の問題も、確かに多少はあったのだろう。だが何よりも、標準よりも小柄だと言うだけでこうも扱いが変わることに、カブラは激怒したに違いない。

だがそれでは、せっかくカキシヤが話をつけてくれたのに何の意味もないではないか。トラガネコの国でまともな職人を探するのが難しいから、カキシヤのような仲介業者が存在していると言うのに。

「まあ、正しい選択だったのかもしれないにゃあ。あの様子だと、チビトラさんはどーしてもハンターを続けたいはずにゃ。でもあの三人がウチで作れるのはせいぜい『走って跳べちゃう永久保証の簡易義足六号』くらいのもだろうし、だったらどこか別の店で、かなり質は落ちるけどそれなりに安くて使える義足を買った方がお利口と言えなくもないにゃー」

「そんな……！」

「いい物を作るにはお金がかかる。自然とお値段もお高めになるにゃ。手が出せないピンポー人は、分相応の粗悪品を買うしかない。これは仕方のないことにゃ」

結局ジュースを全て飲み干して、ミーネは一人満足そうに頷いてみせる。

千宏は言い返す事ができなかった。

「……ローンって制度は、ないわけ？」

「あるにはあるけどにゃあ、そもそもハンターなんていつ死ぬか分からない職業の人間に、そんな大型のローン危なくて組ませられないにゃ」

それも確かにそうである。千宏は眉を潜めて沈黙し、がりがりと髪を掻き乱した。

思い出すのはカキシヤの話だ。あの能天気な三人組に、悪徳商人を見分けられるわけがない。だとすると最悪、カアシユは義足を手に入れられないばかりか、義肢の材料と成り果てる可能性だってあるのだ。

金を出してやるだけならば、簡単にできる。手元には千セパタ程度しかないが、この町で仕事をすれば、もう千セパタ程度を稼ぐことは容易い。

問題は、どうやってそれをあの三人に受け取らせるかだ。

「にゃー。何かふかーく思い悩んでるにゃあ」

ミーネの呟きをきっかけに、千宏は勢いよく立ち上がった。

「ねえ、この辺りで他に義肢職人を当たろうとしたら、普通はまず何処に行く？」

訊ねると、ミーネはいかにも嫌そうに顔を顰めて歯を向いた。

「そりゃ、猫井義肢装具店にゃ。職人の誇りもクソもない、腐った商人のたまり場にゃ！」

何がそんなに気に食わないのか、ミーネは地団駄さえ踏んで猫井義肢装具店とやらを口汚く罵っている。義肢装具店にかかわらずそもそも、『猫井』という起業自体が嫌いらしい。

「言うておくがにゃ！ うちの猫井の半分の値段で倍以上のすんばらしー代物をお客様にご提供できるにゃ！ 天才である私が設計した義肢を！ 生きた精密機械のシャコが加工し！ そしてイヌが魔法処理！ それらをうちでは全てこの店の中だけでやってるにゃ！ 温かみのあるホームメイドにゃ！ 管理の目も行き届きすぎて品質は常時最高にゃ！ それだというのに猫井なんかで作るのは真性のアホのやることにゃ！！」

喋っているうちに段々と熱が入り、ミーネの尻尾の毛が逆立って倍ほどに膨れ上がっている。服に隠れて見えないが、恐らく背中の中も激しく逆立っているに違いない。

体毛がなければ上気して真っ赤になっているのが分かるだろう程に興奮し、ミーネは今や完全に怒鳴り散らしていた。

このまま無視して部屋を出て行ける雰囲気ではなく千宏が立ち往生していると、静かにドアが開いて先ほどのシャコが入ってくる。

そして、

「うるさい」

遙か上空とも言える位置から、目にも留まらぬ速度で拳をミーネの頭に振り下ろした。

ミーネは目を見開いてあぐりと口を開け、白目を向いたままぐらりと床に倒れ付す。特に抱きとめようともせずにミーネを床に転がし、シャコはやれやれと溜息を吐いた。

「すまん。猫井のことになると熱くなるんだ」

まあライバル意識だな、とシャコは言い、すぐに部屋を出て行こうとする。

その背中を、千宏は慌てて呼び止めた。

「あの、ちょっと聞きたいんだけど……」

怪訝そうに振り返り、シャコが身振りで話を促す。

「小柄なトラが、考えうる限り一番いい義足をつけようと思ったら、いくらかかる？」

「あ、小さいトラか」

千宏は頷く。シャコは小さく首を振った。

「元の脚と同等以上の義足を求めるなら、三千は覚悟しておく必要がある。この国は物価が高い。材料を揃えるのも、猫井が買占めにかかっているから苦勞する。出来る事なら、俺も無償で作ってやりたいところだが」

「ただじゃ慈善事業は出来ない」

また、ドアの方から新しく声が上がる。

千宏が振り向くと、そこには少年からようやく青年になったばかりだろう、整った顔立ちの男が立っていた。

男であるはずなのに、歳の頃と顔立ちのよさがよくわかる。彼はまごうことなくマダラであった。そしておそらく、ハンスと同じイヌだろう。

「うちの社長の口癖。社長は絶対に妥協しないんだ。最高の材料で、最高の技術で、最高の品質の物を作りたがる。そして、何より絶対に損をしたがらない」

だから、と続けて、イヌのマダラは灰色の瞳で千宏を見た。

「うちの品物は高いよ。だけど必ず値段に釣り合う物を提供する。それで気に入らなければ何度でも作り直す。断言できるよ。この街でうち以上の義肢を作れる店は存在しない」

淡々とした口調の中に、おごりでは無い自信が滲み出していた。

だが、ここはネコの国だ。彼等は単なる口の上の詐欺集団で、実はカキシヤさえも騙されているのかもしれない。

それでも千宏は、この三人それぞれに好感を持っていた。どうせ誰もが信用ならない国ならば、少しでも好感を持つ人々に託したいと千宏は思う。

「三千か」

それで、カアシユの脚が戻るのなら、

「行こうハンス」

頷き、ハンスは千宏に従って歩き出す。

部屋を出る寸前、千宏はシャコとイヌと、それから床で伸びているミーネに振り向いた。

「近いうちに、また来る。けどもし、あんた達の言葉がはったりで、カアシユにまともな義足が作れなかったら」

千宏は笑った。半分冗談、半分本気で、トラの国ではよく聞く脅し文句を口にする。

「全力で殺すよ。あんたたち全員。どんな手を使ってでも」

シャコは僅かに頷き、イヌもどこか自慢げに笑う。ミーネの寝言だかなんだかよく分からない呻き声に微笑んで、千宏はニヤトリを後にした。

二人が出て行った応接間で、シャコは肩を竦めて天井を仰いだ。

「全力で殺すか。まったく　　トラはいつもああだな」

「いや、あれトラじゃないよ」

しみじみと呟いたシャコに対して何気ない調子でイヌは言い、店を出た二人の客の後ろ姿を窓から覗き込む。

「臭いがオスのトラと、側にいたイヌの移り香だけだった。トラのメスの臭いがしないし、そもそも魔力の欠片も感じない。あの耳、つけ耳じゃなかった？」

ああ、と答えて、シャコは首をかしげる。

確かに、耳は間違いなくつけ耳だった。ではすこぶる良かったが、シャコの目で見れば骨格まではっきりと分かるのだ。

骨格と言えば確かに、トラというには少々やわな印象を受けた気もする。だが、だからといってトラではないと断定するのは、少々乱暴ではないか。

「事故かなんかで耳ちぎれたんじゃないか？ 集音機能付きの耳なんて、別に珍しくもないだろう。魔力だって、隠そう

と思えばいくらでも隠せる。そもそもトラじゃなかったら、一体何の種族だっていうんだ」

呆れたと言うふうに、イヌは小さく溜息を吐く。

「……いいけどさ。君も社長も、本当に自分の興味あること以外には何一つ気付かないんだね……」

そしてふと、何かに気付いたように動きを止め、イヌは肩を竦めてカーテンを引いた。

「どうした」

「連れの方のイヌの方に凄い目で睨まれた。命が惜しいから僕は口を閉じるよ」

「お前の言う事は、時々ミーネ以上にさっぱりわからん」

釈然としない様子で言ったシャコを、イヌはバカにしたように笑う。

「君ってわりとバカだよな」

言った瞬間、頭に強烈な拳骨が振ってきて、イヌは叫び声と共に頭を押さえてしゃがみ込み、股に尻尾を挟んで悶絶した。

奇怪な建造物から脱出し、波止場へと道を戻りる途中、突如恐ろしい形相で建物の方を振り返ったハンスに千宏はぎょっとして立ち止まった。

「……どうしたの？」

「さすがに、少し無理が出てきたらしい」

「はえ？」

「イヌの方にバレてる」

「え？ うそ！ なんで!？」

慌ててつけ耳を確認するが、装着したまま髪も洗える最高級品質のつけ耳は、今もちゃんと付いている。ほんのりと暖かく、自分で触っても本物のように感じるほどだ。

だが、見た目の問題ではないとハンスは静かに首を振る。

「あんたは臭いが薄すぎるんだ。カブラたちと一緒にいれば誤魔化せただろうが、あいつらと離れてる以上、その臭いの薄さじゃトラを名乗って歩けない」

「臭い……って……」

「それと、魔法使いは相手の魔力を感じられる。ネコの基準からしたらトラの魔力なんぞ微々たる物だからあまり気にはされないだろうが、神経質な種族ならすぐに違和感に気付くだろう」

「え……ええー……？」

臭いはまだ何とか出来そうな気がするが、魔力となると流石に千宏にはどうにも出来ない。

「じゃ、どうすりゃいいわけよ。なんか、ヒトの防犯グッズ的なのにいいものないわけ？」

「あるだろうが……そんな物つけてたら、自分はヒトだと宣伝して歩いてるような物だろう。見えなければ問題ないだろうが、詳しい人間に見られたら即座にばれる」

「なにその防犯グッズ！ 無意味の境地じゃん！」

「防犯とはそういう物だ。どんな防犯をしているのか分からないから、犯罪者は警戒して手を出せない、どこにどんなカギがあり、どんな仕掛けがあるか外から丸見えじゃ、破ってくれと言っているような物だ。どう足掻いても突破できない障害で敵を門前払いにするんじゃないければ、防犯グッズは存在すら知られない事が理想的なんだ」

妙に饒舌に力説するハンスだが、目が完全に犯罪者である。

「そもそも、世の中に出回ってる偽装用の商品は、ほんの短時間周囲の目を誤魔化せばそれでいいんだ。家から店までの往復だとか、飼い主同伴の旅行だとか。あんたみたいな特殊なケース、どの企業も念頭においちゃいない」

「そりゃまあ……そうだけどさ……」

それでも付け耳は今の所、ちゃんと効果を発揮している。他に何か役にたつものがあるのでは無いかと、期待してしまうのは仕方がない。

「じゃ、どうすりゃいいのよ……」

「あくまでトラを装うなら、大量のアクセサリに魔法アイテムを紛れ込ませて周囲の目を誤魔化するのが一番簡単だろうな」

一瞬、千宏は市場で惜しげもなく肌を露出して歩いていたトラ女たちを思い出した。

そして、げんなりとして肩を落とす。あれは、背が高く腰のきゅっと締まった、豊満な肉体のトラ女だから似合うのだ。日本人の標準体型にどこまでも準じる千宏がやっても、物悲しい雰囲気包まれるだけである。

「で、臭いは香水……？」

引きつった表情で千宏が訊くと、ハンスは機会のようにこくりと頷く。

「でも、隣で香水の臭いぷんぷんさせてたら、イヌのあんたには辛いんじゃない？」

「堪える」

それが仕事だ、とキッパリとハンスが答える。初めてハンスを護衛らしいと感じた千宏であった。

「ま……その辺はなんとかするよ。アクセサリーね……」

フードとローブで完全防備した上からアクセサリーをゴテゴテと載せるとなると、ゲームやアニメでおなじみの古いババアのようなことになりそうだが、この際贅沢は言っていない。

「とにかく、トゥルムと落ち合う前に猫井ってところ探して、それから仕事場のめぼしをつけよう。そのついでにアクセサリーとか見て……魔法がうんぬんってのはあたしには全然わかんないから、そハンスが選んでよね」

言って、千宏は海沿いを歩き出す。

ネコの国で、トラであると言う事。よくよく考えてみれば、随分と難儀な話だ。

いっそネコに鞍替えしようか。それとも、ハンスにあわせてイヌになるうか。そんな事を考えて、千宏はいいやと首を振る。

カアシュがハンターであることを誇りとするのと同じくらいに、千宏にとってはトラであるということが、何より大切な誇りなのだ。

果たして。

ニヤトリからの帰り道、多くの人々でごった返す船着場のはずれに、その男は立っていた。

松葉杖で体重を支え、海面を覗き込むようにして、陸のギリギリに立っている。誰かがうっかり肩をぶつけてもしたら、そのまま海に落ちてしまいそうだった。

否、そもそも。

そんな事をしなくても、今にも海におっこちてしまいそうで

「早まらないでええええ！」

叫んで、千宏はカアシュに思い切り飛び掛っていた。その表紙に松葉杖がずるりと滑り、片足のカアシュは踏ん張る事が出来ずによろける。

愕然と目を見開き、カアシュは一言、

「チヒロ　！？」

と叫んだだけで、大きな水しぶきを立てて海へ落ちた。むろん、千宏共々である。

啞然として顎を落とし、立ち尽くしたハンスの耳に、口々に叫ぶ声上がる。

「おおい、身投げだ！」

「違う！ 殺した！」

「落ち着け、とにかく浮き輪もってこい！」

「おおい、シャコがサカナいないのか！ ネコは水が嫌いなんだよ！」

「おいそのイヌの兄さん！ あんた泳ぐの得意だろうイヌなんだから！」

肩を掴まれてようやく、ハンスは我に返って駆け出した。

「ち、チヒロ！」

慌てて波止場のふちにひざまずき、二人の姿を海面に探す。すると水中から一本の腕が突き出し、力強く陸を掴んだ。

ついで、カアシュの顔が現れ、最後に千宏が苦しげに顔を出す。

「がは！ おぼれる！ 水！ から！ 海水！」

言葉の羅列を連発しながら激しく咳き込んではいるが、千宏はどうやら無事らしい。だが安堵したのもつかの間、千宏はかっと目を見開き、一番の被害者かつ命の恩人であるカアシュを容赦なく殴りつけた。

「バカ！ バカじゃないの！ほんとバカ！ なんだよ脚がなくなったくらいで！ 死ぬことなんてないじゃないか！ 義足だってあるんだから！ またハンターできるんだから！」

「お、おい！ おい待てよチヒロ……！」

「なのになんで死のうとなんてするんだよかっこ悪い！ みっともない！ 自殺するやつなんてトラの風上にも置けないんだ！ カブラだってブルックだって、アンタのために頑張ってるんじゃないよ！ あたしだって、あたしだってほんとに　すごい心配して……！」

「待っておい！ 落ち着け！ っていうかまてまて、なんでお前がここにいるんだ！ しかも俺死のうとなんかしてねえし！」

「だって思いつめた表情で海なんか見てたじゃない！」

「泳いでる魚が美味そうだなーって見てただけだってーの！」

そこで、大きな波が一つ起こり、二人の頭に冷や水をぶっ掛ける。波が引くと二人は頭を振って水気を飛ばし、そして同時に盛大なクシャミをした。

「とりあえず、上がらないか」

そう、上から声をかけたのはハンスである。

千宏とカアシュは頷き合うと、ハンスの手を借りてびしょ濡れの体を海水から引き上げた。

そうして、道行く猫の好意による魔法ですっかりと乾燥された千宏とカアシュは、とりあえず落ち着こうというハンスの助言に従って手近な料理店に滑りこんだ。

「……で、だ」

注文した料理を待つ間、切り出したのはカアシュである。

「カブラ達にはぶかれて……それで腹が立って追いかけてきたのか……？」

身も蓋もない言い方だが、全くの事実である。千宏は何かもう少しマシな言い方は無いかと少しだけ考えて、結局諦めて頷いた。

「まあ、そうね……」

カアシュが盛大に溜息を吐き、テーブルに肘を着いて額を押さえる。その態度に、千宏はすこぶる不満であった。

「もっとさあ、嬉しそうにできないのかなあ。無力でか弱い女の子が、友情に熱く追いかけてきてくれたんだよ？」

「ネコの国だぞ……チヒロ、トラの国とは違うんだ！」

千宏は両手を挙げて天井を仰いだ。

「その手の言葉はあたしの隣で座ってる誰かさんから散々聞いた。危険なのはもう十分承知してるよ！ 大体、あんた達だって人のこと言えないじゃない。早速問題起こしてさ、折角カキシャが話をつけてくれたのに！」

言い返すと、カアシュは驚いたように耳を立てる。

「どうして知ってるんだ」

「さっきニヤトリに行ってきたから」

にわかにカアシュの表情が曇る。肩を落として深くと溜息を吐き、カアシュは苦笑いのような表情を浮かべた。

「そりゃ……みっともねえ話、聞かれちまったなあ……」

「みっともないって……」

「チビにはまともな義足も無いってよ」

「カアシュ！」

卑屈な言葉に思わず声を荒げると、カアシュはますます落ち込んだ様子で視線を逸らす。

千宏はなにか居心地の悪いものを感じて、イライラと指をかじった。

「あのさ……その話なんだけど……他の業者を探してるんだって？」

「ああ……カブラとブルックがな。けど、どこもうまく行かなくてよ」

「ねえ、やっぱりあそこで作りなよ。ニヤトリでさ」

カアシュは少し困ったように千宏を見る。

「話、聞いてきたんだろ？ 無理だよ。俺達じゃとても手がでねえ。俺たちはバカだからよ、こういう時に備えて何も用意してなかったんだ」

「大丈夫だよ！ あたしがいる。足りない分、あたしがなんとかするから！ だから」

「やめろよ」

珍しく、カアシュが鋭い声を出した。ぎくりとして千宏が黙ると、カアシュは気まずいというより、不快そうに視線を逸らす。

「……惨めになる……だろ」

「……でも……でもだって……絶対に、あそこで作った方がいいよ。他のトラの義足だって沢山作ってるんだって、カキシャ言ってたもの。品質は絶対だって！ じゃあさ、貸すだけならいいでしょ？ あたしがお金を貸すから、それで義足作って、またハンターやって、それで返してくれれば」

「やめろって言ってるだろ！」

怒鳴って、カアシュはテーブルを殴りつけた。

周囲のネコ達がちらとこちらの視線を投げ、再び自分達の談笑に興じる。千宏は青ざめて唇を噛み、カアシュに睨まれて凍り付いていた。

「……俺は、チヒロが好きだ。今も友達だって思ってる」

「じゃあ……だったら……！」

「だから！ だから……俺の誇りを踏みにじらないでくれ」

「そんな……！ あたしはただ……ただカアシュが……！」

心配なだけなのに、と怒鳴ろうとして、しかし千宏は口を閉ざさざるをえなかった。

黙れと、これ以上は何も聞きたくない、あんなにも陽気に千宏と接してくれたカアシュの目が言っている。それが酷く悲しくて、千宏は膝の上で拳を握り締めた。

「……お前はさ、何もかも捨てて、全部捨てて、何のためかは知らねえけどさ、金を稼ぎに来たんだろ？ すごいと思うよ。俺はチヒロを応援したい、なのに自分のつまんねえヘマでさ、チヒロが体を張って溜めた金にあっさり頼るなんて、あんまりみっともないじゃねえか」

分かっている。自分の問題ならば、誰の手も借りず、自分で解決しなければトラの誇りが許さない。少なくとも打つ手がなくなるまで、どこまでも足掻いてからで無ければ救いを求めるなんて考えもしない。

それが、トラという種族だ。

千宏は全て分かっている。だからこそ自分もここにこうしているのだから、理解できないふりなどできはしない。だけど最後は、本当に自分の力じゃどうしようもなくなった時は、トラは素直に全てを諦めるか、そうでなければ仲間を頼る。

一つの答を期待して、千宏はカアシュに質問を投げかけた。

「……もし、もし本当に、義足を作るのにさ、どうしてもお金が足りなかったら……」

頼ってくれる？ と訊ねる前に、カアシュは笑った。

「そしたら 潔く諦めるさ」

一瞬、千宏は無意識に呼吸が止まるのを意識した。

違う。期待していた答えは そっちじゃない。

「そうだなあ。ダメだったらハンター用の診療所で、医者でもやってみようかな。俺、一応医学やってるしさ。何度も世話になってるし……」

椅子が倒れる程乱暴に、千宏は勢いよく立ち上がってカアシュの話を遮った。

料理を運んできたネコの店員が、ぎょっとして千宏を見る。

「あ、そう」

それだけ言って、千宏は大きく息を吸う。

辛うじて涙は堪えた。だが、声が震えるのまでは押さえられそうも無い。千宏は考えうる限りで一番性格の悪い笑顔を浮かべ、カアシュを思い切り見下ろした。

「なんだよ。友達って 結局口だけなんじゃない。あんただってあたしのこと仲間だなんて、友達だなんて、これっぽっちも思っていないんじゃない」

さっとカアシュが表情をかえ、慌てたように腰を浮かせる。

「違う、そうじゃない！ そういう意味じゃないんだ、俺はただ 」

「何が違うんだよ！ あたしに頼るくらいだったら、ハンターやめた方がマシだって、そういうことでしょうか？ あんたにとって何より大事な、がむしゃらになってしがみ付いてきたハンターって仕事をやめることになったって、あたしに頼るのは御免なわけだ！ あたしがトラじゃないから。あたしが奴隷だから！ あたしがヒトだから！」

「チヒロ！ よせ！」

叫んだハンスを振り払い、千宏は拳をテーブルに打ち付ける。

先に裏切ったのは自分の方だ。ならば自業自得なのかもしれない。だがそれでも悔しくて、悔しくて仕方がなかった。

「そうだよ。あんただって誇り高いトラだもんね。誇りを踏みにじて悪かったよ。あたしみたいな下等な存在が、あんたを助けたいって、友達だって、頼られたいって、そう思うこと自体がおこがましいって話だよ。たかが性奴隷の分際でさ！」

叫んで、千宏は店を飛び出した。その後を、ハンスが慌てて追いかける。

カアシュも追いかけて立ち上がり、しかし片足では上手く行かずバランスを崩して転倒した。

見苦しく床に倒れ付し、カアシュは拳を握り締める。

「くそッ……！」

忌々しげに罵って、カアシュは乱暴に床を殴りつけた。

[前へ](#) [次へ](#)